

遊牧がモンゴル経済を変える日

著者	小長谷 有紀
発行年	2002-11-01
URL	http://hdl.handle.net/10502/4581

はじめに

ひとつの里程標をめざして

松原 正毅

人間にとって経済とはなにか。これは、かなり根源的な設問のひとつといえる。『広辞苑』に記載された経済の定義では、「人間の共同生活の基礎をなす物質的財貨の生産・分配・消費の行為・過程、並びにそれを通じて形成される人と人との社会関係の総体」となっている。

はたして、経済は人間にだけ特有の事象なのか。物質的財貨の生産・分配・消費の行為・過程という点をみれば、アリの仲間でこの一連のながれをこなしている事例がある。おそらく、物質的財貨の生産・分配・消費の行為・過程の原初的形態は、生物の世界のなかにみいだすことは可能であろう。しかし、生産・分配・消費のどのレベルをとっても、人間社会において他の生物社会と比較にならないほどの規模拡大の現象がみられるのは確実といえる。その点をとれば、経済が人間社会に特有の事象を多くそなえたものということ

が可能かもしれない。

人類史における生産・分配・消費の行為と過程は、かなり早期から観察されている。旧石器時代に属する東アフリカの遺跡で、規模の大きい石器製作場のあとが発掘されている事例からも、一連の行為と過程の存在が確認できるわけである。生産・分配・消費の規模がいつきよに拡大するのは、新石器時代の農業革命をへてからだ。農業が権力の確立を背景に体系化されるなかで、余剰が生まれ、富の蓄積がはじまる。ここから経済の自己運動がおこり、際限のない累積的蓄積への欲望の肥大化がみられるようになった。

経済は、人間にとって魔物の役割をはたしてきたのではないか。経済が人間社会をある面で活性化する機能をはたしていることはたしかであるが、適度なコントロール下におくのは不可能にちかい事象といえる。とくに経済行動を最優先するホモ・エコノミクス（経済人）が出現するとき、その活動は非人間的な領域にまでたちいたってくる。ここで、経済の魔物性が最大限に発揮されることになる。利潤追求を最高の価値とするため、さまざまな面での破壊行為が生じるからだ。それは、ときには人格破壊や人間性の崩壊にいたる道につながる。この経済の魔物性を克服するすべをみいだすことができなければ、人類の未来はそれほど明るいとはいえないだろう。

遊牧も、あきらかに経済的行為のひとつである。それは、生産・分配・消費という一連

のサイクルを内包している。それでも、本来的に遊牧は農業を基盤とした経済行為と質的に異なる要素を保持するといつてよいだろう。もっとも大きい質的に異なる要素は、遊牧においては累積的蓄積がうまくいえないという点である。それに対応して、大きな余剰が生じない。したがって、本来的な遊牧社会においては、過剰な利潤追求という経済行為はおこりにくかった。遊牧経済は、本質的にささやかな経済といえる。ここに、魔物性をもった経済の展開とちがった道をみいだす可能性があるのではないだろうか。

市場経済化の波にまきこまれつつあるモンゴルの現在にとって、経済とどうむきあうかは重要な課題とならざるをえない。とくに遊牧と市場経済化とのおりあいをどうたもつかによって、モンゴルの国づくりの方向がちがってくることは確実である。ささやかな経済に基盤をおきながら、市場経済化をすすめるのは可能だろうか。

現時点で、モンゴル経済のこころみに完全な解答をしめすことはできない。とくに、モンゴルの地に適した市場経済化のモデルを提示することも困難である。重要なのは、ささやかな経済としての遊牧の体系を持続するなかで、市場経済化のメカニズムを機能させることである。それには、まず遊牧の体系をよく理解することが大前提となる。そのうえで、移動と分散を基盤にしながら、集約的な生産と流通形態の設計を考えるべきであろう。こうしたながれを現実化するためには、あくまでも遊牧立国という基点を確保しなければなら

らない。

遊牧の知恵を生かすことは、いわゆる伝統的な形態への固執を意味するものではない。それは、遊牧社会のもつ社会編成の柔軟性や移動性、情報性などの長所を最大限にひきだす知恵を、遊牧のなから学びなおすことである。遊牧は、けっして遅れた生活様式ではない。社会主義体制の偏光プリズムをはずしたうえで、遊牧の再評価をおこなう必要がある。そこには、地球環境とのかかわりのなかで一方的な破壊につきすすむのとは異なる道筋がしめされているはずだ。問題は、この道筋を正しくよみとって、その方向にあゆみをすすめることができるかどうかであろう。

本書に収録された文章は、いずれも遊牧に立脚しながら市場経済化にどのようにとりくむべきか、実践のころみのなかでどのような問題があったかを、現地に身をひたしながら考察をすすめたものである。新しいモンゴルの国づくりのゆくえを、真摯な姿勢でみきわめようとするころみでもある。これらの論稿が、遊牧と市場経済化の問題を考えてゆくうえでの一とつの里程標となることは確実である。それは、モンゴルをふくめた日本や世界のゆくすえを考えるうえで、さまざまな示唆をもたらすであろう。多くの人が、本書がひろく利用されることを期待している。